

第 2018 回定例研究会報告要旨（6 月 27 日）

ツーリズム・レクリエーションと牧野保全

大橋 めぐみ

牛馬の放牧により形成された草地景観・生態系は都市住民にも高く評価されており、山菜採りやドライブから、体験学習やスキーまで、幅広いタイプのツーリズム・レクリエーションが行われている。本州の草地面積の 4 割を占める公共牧場（牧野）へのツーリズムを、観光目的で追加の投資が行われている「施設型」、学習会やイベントなどのソフトを提供する「イベント等」、特に何も用意しない「山菜・景観等」に区分すると、「施設等」の集客規模が 5 万人以上の牧野が関東・中部・関西地域で 2 割を占めるが、北海道・東北地域では 1 割を切る。一方、「山菜・景観等」は地域的な偏りが比較的少なく、過半数の牧場で一定の入り込み客が見られ、交通アクセスが不利な地域にとっても有望であるといえる。

こうした「山菜・景観等」の来訪者が年間 2 万人来訪している岩手県安比牧野において、その影響を分析した。地域の利益という視点では、従来の観光と比較した売り上げ規模の小ささが指摘されるが、SERVQUAL を用いて計測した来訪者の満足度は非常に高く、「人工的な施設のない景観」や「観光客向けでない地元の生活」が高く評価されていた。また、牧野保全の面では、放牧中止による草地への灌木の進入、盗掘による山野草の減少、来訪者による踏み荒らしなどの多くの課題があった。来訪者の多くはフリーライダーとなっており、牧野組合や観光業者など多様な主体が関与することが対応を難しくしていたが、一部の来訪者がボランティアとして保全活動に取り組んでいた。

大半の牧野では、来訪者の「基金や入場料の導入」に対する意見は賛成と反対の二つに大きく分かれる。こうした牧野保全に対する意識を掘り下げて明らかにするため、野波ほか（2002）のフリーライダー発生下での環境配慮行動の理論を援用して、岩手県の 3 牧野

を対象に来訪者へのアンケート調査を行った。「来訪回数」「旅行への満足度」「愛着（特定の場所に対する個人の情動的なつながり）」「基金への参加の意思」などの 11 項目について、パス解析を行った結果、旅行に満足し、愛着をもち、来訪地への知識も高い来訪者は、基金に参加する傾向がある。しかし、多くの来訪者は旅行に満足して、環境を保全しなくてはならないという「規範」は持っているものの、基金などの保全活動の参加には結びつきにくいということが分かった。調査地域においては、愛着をもつ来訪者は 2 割程度であり、来訪地への知識については、草地荒廃や文化景観を認識している来訪者は 2 割以下であった。

こうしたツーリズムを牧野保全に結びつけていくためには、愛着をもつ来訪者の組織化と、それ以外の来訪者の受益者負担の仕組みづくりを並行して行う必要があると考えられる。